

第 157 スタジオ夜話

「今ならまだ間に合う昭和の音創り」

☆はじめに

6月になりました。まだ梅雨入りはしていませんが（執筆時）台風は既に6号が太平洋上を日本に向かって北上しています。

気象庁の予報では今年の梅雨入りは、沖縄と奄美で平年より早かったものの、九州から東北にかけては「平年より遅い」予想となっています。近年地球温暖化の影響が各地で豪雨など異常気象が発生しています。この先酷いことにならないことを祈っています。また中東情勢の影響で私たちの暮らしにも様々な問題が生じています。筆者が暮らす伊東市でもゴミ袋が足りていません。市は一般のポリ袋でのゴミ出しが可能ということにしています。

日々思うのですが以前からスーパーなどでお惣菜を買う時、全ての商品がバリバリとしたプラスチック状の容器に入っています。今の人達にとっては当たり前のことなのですが、昭和の時代（40年代頃まで）お肉屋さんでは、どこの精肉店でも当たり前のように「竹の皮」が使われていました。単なる包装紙の代わりではなく、冷蔵庫が十分に普及していなかった時代に食品を守る「先人の知恵」が詰まった、非常に合理的な包装方法でした。高い抗菌・防腐作用：竹の皮に含まれる成分には天然の殺菌効果があり、肉の傷みを防ぎました。優れた吸湿性と通気性：肉から出る余分な水分（ドリップ）を吸い取りつつ、蒸れを防いで鮮度を保ちました。油や水に強い：表面に天然のワックス質（蠟）の層があるため、肉の脂や水分が外に染み出しにくい性質がありました。今のプラ包装には無い機能です。その他に買い物時には目的によっては容器を持参したりもしていました。「竹の皮」コスパは全く期待できませんが容器持参は若干の手間はかかるものの今でも可能な販売方式だと思っています。プラ包装は地球に優しくありません。（ナフサもありません。）なんとか昔に戻らないものかといつも思っ

ています。

さて今回のスタジオ夜話は予告のとおり「今ならまだ間に合う昭和の音創り」。「先人の知恵」？が詰まった音創りのお話です。お付き合いよろしくお願いいたします。

☆サウンドコンテンツ「昭和の音創り」って？

映画やTVなど様々なコンテンツ制作において音創りは重要な作業のひとつです。この音創りは今も昔も変わりありません。創意工夫の世界です。しかし現在その創意工夫の必要性が次第に薄れて行く傾向にあります。また「AI」の出現によって一層そうした傾向が強くなって来てもいます。欲しい効果音などそのうち「AI」にお願いすれば素材音の収録さえ必要無くなるでしょう。便利な世の中になりました。今更「昭和の音創り」もないでしょう。その通りです。昭和の手間暇をかけた音創りはこの先必要ないのかもしれませんが。また本質的なことでいえばその手間暇が作品の優劣を決定するものではないからです。着ぐるみのゴジラやひとつづつ手作りした戦車もいまや非常にリアルで本物？以上の映像や音響で表現できる時代になりました。当時の作品が今人気なのはノスタルジックな価値感と当時は想像する現代人の興味の対象だからなのです。これも流行なのでいつまで続くものなのかわかりません。しかし当時のゴジラの吠える声？は永遠に不滅なのです。現在のゴジラ？の声はそれなりに素晴らしいのですが現在のゴジラの声に当時の声を入れ替えてもそのエネルギーは勝るとも劣らないと思います。（筆者の思い込み？）またこの声を現在作るとなるととても大変な手間暇がかかります。できないかもしれませんが。ミュージシャンが昔の楽器を大切に使っているのも使い慣れているということだけではなく、その音も大切に保存？しているということかもしれません。今回のお話「昭

和の音創り」はそんな意味合いでもありません。また「昭和の音」は今では出来ない音、現在のクリエイターにとってそれは昔の音では無く未知の新しい音ともいえるでしょう。

☆「昭和の音創り」具体的に①

エコールームって知っていますか？

まず始めにエコーとリバーブの違いは？昔の我々（筆者たち）はその定義が良かった。残響も「こだま、山びこ」もみんなエコーでした。現在は「残響」＝リバーブ、「こだま、山びこ」＝エコーです。「残響」リバーブは様々な反射音が複雑に重なり空間性をもって聞こえるもの、例えば、お風呂場、トンネル等々、「こだま、山びこ」エコーは元音に対して反射音が遅れて規則的に繰り返して聞こえるもの、例えば、日光東照宮の「鳴き竜」やディレーエフェクターの繰り返しモード（フィードバックディレー）などです。さてエコールームのお話に戻ります。

エコールームとは基本的にはリバーブルームです。残響付加室です。お風呂場です。昔NHKには立派なエコールームがありました。それなりの広さがあり、天井には移動式の反射板が設置され残響をコントロールすることができるものでした。現在あるかないかは不明です。（カスタマーセンターに問い合わせたところ「そんな部屋は無い」と言われました。食い下がって上席の方とお話したところ正式には「広報を通せ！」と言われました。（広報を通すと内容までチェックされ色々指示されます。面倒くさいので）不明とします。

デジリバやPCが主流の今日、スタジオに付属してこんな贅沢な設備はなかなか所有できないのですがアコースティックな独特の残響音には感動を覚えると思います。いつもお世話になっている日本大学（芸術）の茅原先生のスタジオには水を扱う水槽がありそのブースではその水槽（コンクリー



写真2



写真1



STUDER A80RC Vari-Speed使用

写真3

可変速付きのアナログ
テープレコーダー
スピードコントローラー
ポテンションで設定したスピー
ードで正確に走行します。



写真4

茅原先生の手業(手技)

録音された音素材を手持ちで
再生ヘッドにタッチさせ、その
テープを動かすことで音を創り
ます。元素材音の選定から出
上がりまで経験と感が重要な
音創りです。

ト製)を使い簡単なアコースティックな残響を試すことができます。写真 1.2 鉄筋コンクリート造りの階段室なども利用出来るでしょう。アコースティックな残響を試してみたいいかがですか。

☆「昭和の音創り」具体的に②

わざと音を悪くする・・・？

その昔アナログ時代には何の違和感も感じていなかったのですが昨今のデジタル時代になって感じたことがいくつかあります。例えばナレーションです。気にしなければとてもクリアでナレーターの声質も最高のクオリティーで収録されていますが、筆者にはその音に存在感？が不足している様な気がします。(勝手な思い込みです。)以前 NHK の太田時雄氏とご一緒した仕事で調整室にアナログテープレコーダーを持ち込んでナレーション収録したことを思い出します。既に世の中はデジタルの時代でし

た。ナレーションはミキサー(デジタル)から一度アナログレコーダーに入力されそのまま録音しながら再生ヘッドで出力されます。確かに筆者には存在感が増した音(錯覚?)に感じられました。わざと音を悪くしたのです。

この手法はなかなかのもので音を良くする技術は重用されますが悪くするものは使いません。アナログレコーダーを使って音質を悪くする技術は低速録音しながら再生するといい感じで音質劣化します。極低速が可能ならば思いがけない効果音を創ることもできます。また一定の速度ではなく可変速や手動

によっても様々な音創りができます。茅原先生のスタジオには現在も可変速テープレコーダーが設置され「可変速」と「手わざ」による音創りが行われています。弓矢の風切り音などはこれが一番、その後デジタル機器で方向性など様々な加工します。写真 3.4

ハイビジョン放送・災害・報道・海外派遣

SATCUBE

「驚愕の超小型平面アンテナ！」

スタンダードなSCPCでのSNGモデルに加え2020年7月に新しくスタートしたスカパーJ SAT社の新サービス「Sat-Q」モデルもラインナップ。お客様の運用にマッチした利用が簡単にできます。放送などのHD映像伝送・災害通信・海外通信・企業のBCP向けなど幅広く利用可能です。

<SATCUBEアンテナの特長>

- 47cm x 30cm x 5.5cmビジネスバッグに入ります！
- SCPCモデル・Sat-Qモデル・各種あり
- 災害/報道/海外派遣映像音声伝送インターネット接続/ハイビジョン伝送可能
- わずか1分で通信可能組立不要・工具不要
- 衛星捕捉は内蔵ディスプレイのアシスト機能で素早く簡単
- 航空機持込可能バッテリーで運用可(約3時間運用可能)
- 運用中のバッテリー交換可(ホットスワップ対応)
- モバイル中継装置(TVU・Live U・スマテレ等)と連携可

AI Communications k.k. エーティコミュニケーションズ株式会社

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-55-14
TEL: 03-5772-9125 http://www.bizsat.jp

スタジオ夜話



写真5

EMT140 鉄板式

世の中のデジリバなどのプレートモードのモデルとなった原器で構造は畳1畳ほどの大きさで中にスプリングで吊るされた鉄板があり、その鉄板をコイルで振動させピックアップするものです。コ位置を変えることによって残響時間をコントロールします。そのためのリモートがあります。



写真6

リモートコントローラーです。ユニットだけで販売されて音声卓などの実装用



写真7

写真7はAKGのスプリング式BXシリーズ

400mm X 400mm以上ありスプリング式でもかなり大型で重量もある。



写真5

140の内部です。

黒い部品がピックアップや駆動用のコイルです。

モーターでそれらが移動します。移動中はノイズになりますので残響時間の連続可変はできません。

☆「昭和の音創り」具体的に③

「今ならまだ間に合う？」

さきほどもお話ししましたがミュージシャンが昔の楽器を大切に使っているのも使い慣れているということだけではなく、その音も大切に保存？しているという…音響機材にも同じことがいえます。ハイビット、ハイサンプリングのデジタル機器では出せない（創れない）ローテクの音、今や昔の8ビット、デジタル音は作れません。独特の音質の音源となってしまいました。試しに「生成 AI」で作ってみてください。全く違うものができます。リバーブも同様です。ルームエコーは設備さえあれば今でも可能ですが当時の鉄板式やスプリング式は機材を持っていなければ不可能です。

デジタルリバーブのプレートモードはご存じのように EMT 社の 140 をモデルにシュミレーションされています。実際の 140 と比較したことがありますか？似て非

なるものです。茅原先生のスタジオでは現在も 2 台現用として運用されています。写真 5.6。スプリング式も当時はありました。AKG の BX が有名です。写真 7。これらの機器は既にもありません。古い機器を大切にメンテナンスして使用することが重要なのですがメンテナンスできるエンジニアも非常に貴重な存在となってしまっています。他にも当時ものがあります。ローランド RSS シリーズの RV800 スプリング式のリバーブで AKG のように大型ではなく他のエフェクターのように標準のラックマウントに実装できるものでプロの間でも随分と使われました。写真 8。

また同じシリーズの PH830 フェイズシフターは独特のシフト感を音源に与えることで曖昧な空間を表現する効果音によく使われました。写真 8。

両機種ともアナログ機器です。デジタルのエフェクターも当時物は独特の効果が重用されました。写真 9 いずれの機器も既に無

くなりましたがかりうじてオークションサイトなどで入手可能です。かなりの高値がついています。現在の高性能なエフェクターよりもそういった高値ですが効果音などを創るスタジオにはあっても良いと思います。「今ならまだ間に合う？」メンテナンスできる環境があればまだ間に合います。

写真 9

☆「昭和の音創り」具体的に④

コンテンツ制作の作業環境も昭和？

筆者がかつて勤務していた日本大学（芸術）では東日本大震災 2011 年（平成 23 年）以前から校舎の老朽化が進み安全面で問題があり再建築となりました。録音スタジオなども新しくなりました。教育機関ということもあり非常時の避難なども考慮した設計プランとなりスタジオとしては不要な出入口もあります。世の中の多くの録音スタジオはその出入口付近で火災や崩落などが起きたら助かりません。校舎全方向に



写真8

左上の写真はローランドRSSシリーズのRV800
AKGと比較すると2Uサイズなので扱いやすい大きさで、加えて様々な機能を有しプロの間でもエフェクターとして多用されました。

左下の写真は同じシリーズのPH830 フェイズシフター
当時はもとよりこのシリーズはいまでも効果機器として使われています。入手も今ならまだ間に合います。



写真9

同じくローランドのデジタルエフェクターです。
RSSシリーズの後継機になります。初期のデジタルエフェクターで独特の効果を作り出します。機能も驚くほどたくさん搭載されとても便利なものでした。勿論この効果を使った音はここでしか創れません。



写真10

今回ご協力いただいた方々です。
中央が日本大学(芸術・放送学科)教授 茅原 良平先生
茅原先生にはいつもお世話になって感謝しています。
左が筆者のアドバイザーで古いノイマンのカッティングマシンからあらゆる音響機器の補修や管理まで任せられるプロのエンジニア、
原 正和 氏 相談事あればアテンドします。筆者まで
右端の醜いオヤジが筆者です。
お三方には誌面をもってお礼申し上げます。

すべてのスタジオの出入り口があり非難が可能です。併せて音創りのため 50 坪を超える広さのスタジオや水を扱うことができる、ホーリースタジオ的なものも造りました。茅原先生は建築の際スタジオ間のケーブル配管など自身で確かめ設備を整えました。録音スタジオは 4 つあります。他に音専用の編集室もあります。すべてに LAN が通り素材のやり取り、調整卓の LAN を使ったりリモート運用が可能です。TV モニターで確認すれば各スタジオを調整室付のブースとしても使えます。また各スタジオにはそれぞれ目的を持ったブースも設置されています。サウンドドラマや映画、TV などの音声制作にはたいへん恵まれた環境になっています。今や 50 坪を超える大スタジオなどほとんど見かけません。外からの音が無い広い OFF の音、必要無いかもしれませんが録れるのです。また蛇口から流れる水音、バケツをひっくり返した音、砂利道を歩く音、等々工夫次第で収録でき

る環境が整備されています。建築当時、音の世界は 5.1 サラウンドの時代で調整室はその仕様になっていました。現在世の中は全方位 360° の時代ですがサラウンド環境はそのための作業環境としても大変有用なものです。「昭和の時代の音創り」はこうした背景で行われていました。

最新鋭のデジタル機材と昔のアナログ機器、無駄な大きさのスタジオや水や泥の使えるスタジオ（普段はあまり使わない？）は音創りで理想的な環境と言えるでしょう。何かがそこにはあります。あとは人材の問題。昭和をメンテナンスできれば（少なくとも機材的には）未知なる音創りの可能性も見えてきます。「今ならまだ間に合う昭和の音創り」のお話でした。写真 10

☆次回は

現在音創り作業のほとんどが PC ベースで行われています。コスバ、タイパ、は絶大でこれに「生成 AI」などが加わればほとんどの問題は解決します。もはや音の専門職は無用の時代となりつつあります。読者皆様の中ではアナログテープのオーディオ編集など話には聞いたことがあるが実際に経験したことがある方はごく少数で、現場では既に 10% 未満になっていると思います。この現状、PC ベースでの作業の歴史は古くかつては PC ベースでの作業とは程遠いオートメーションミキシングに始まるものでした。その発想や歴史から現在の作業をみることは無駄ではありません。

次回は PC ベースでの作業、その昔のオートメーションミキシングの作業と比較しながら振り返ってみます。

— 森田 雅行 —